

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 20 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520501

研究課題名(和文) 標識・看板・ステッカー慣用表現の日独対照研究

研究課題名(英文) A Contrastive Study of Sign Expressions in Japanese and German

研究代表者

西嶋 義憲 (NISHIJIMA, YOSHINORI)

金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号：20242539

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：言語表現の日独対照研究では、対応する表現に視点(視座)の違いが認められると指摘されることがある。本研究は看板・標識・ステッカーなどに印刷されている定型的な表現を収集し、対応する日独表現を対比した。その結果、これらの機能的に等価な表現においても、視点の違いが確認できた。しかしながら、異なる視点をもった表現が出現する比率は、標識が約28%、看板が約23%であった。この結果は、従来の研究が明示してこなかった数値であるが、予想外に低い値であるように見える。この理由としては、調査対象が公共空間において機能的かつ意味的に対応する標識と看板における定型的な表現に限定されていたためと推測される。

研究成果の概要(英文)：Research on the perspectives from which linguistic expressions are formulated showed that Japanese and German employ different perspectives. The main purpose of this study is to show how and to what extent Japanese differs from German in the perspectives from which corresponding expressions are formulated by comparing functionally equivalent conventional expressions (sign expressions in public places and linguistic expressions for traffic signs) in Japanese and German. These corresponding expressions were compared mainly with respect to perspectives from which they are formulated. The comparison showed different perspectives. However, the analysis reveals that the percentages of difference are about 28% and 23% in the comparison of sign expressions and traffic signs written in Japanese and German, respectively.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：看板 標識 ステッカー サイン表現 慣用表現 日独比較 視点 視座

## 1. 研究開始当初の背景

日本語とドイツ語の意味上対応する表現には表現視点(視座)に違いがあるようだ。一般に、ドイツ語は事態の起きている場面の外部におかれた表現視点から、日本語は事態の起きている場面の内部にある視点から、それぞれ表現を形成する傾向にあるとされる。このような表現視点の違いを例証するために、従来、文芸作品の原文とその翻訳を取り上げ、対応する表現どうしを比較するという方法がとられてきた。比較の際に翻訳を用いる方法は、たしかに同一内容を表わす表現どうしを対応させることができるという点で優れているが、方法論上の問題があると考えられる。そのような方法論上の問題点は質と量の2面から指摘できる。質に関しては、翻訳を利用することによる比較可能性の問題である。すなわち、起点言語の表現形式による訳文への影響や訳者による訳文の文体上の個人差を完全に排除できないという点である。量については、対応する表現が任意に取り上げられ、対比されるが、異なる視点の出現頻度が不問にされてきた点である。

そこで、このような問題点を克服し、より客観的な比較を可能にするために、筆者はかつて、日本語とドイツ語の対応するコミュニケーション行動制御慣用表現を利用した比較が有効だと提案した。そして、平成20~22年度科学研究費補助金によるコミュニケーション行動制御慣用表現の研究により、その成果の一部として、対応する場面で発せられるコミュニケーション行動制御慣用表現に関して表現形成の際の視点の違いを明らかにした。それによると、対応する場面で発せられる慣用的な表現において日本語では話し手が聞き手への共感に基づいて表現形成を行なう傾向にあるが、ドイツ語では話し手と聞き手との間の対立を基に表現が形成される傾向にあることが

わかった。たとえば、公園から通りに出ようとしている子どもに対して、親は、日本では「危ない!」と言うことが多いが、ドイツでは“Halt!”という表現を用いる傾向にある。前者は「共感」に基づき、状況内視点から危険な状況を叙述する表現であるが、後者は「対立」を背景として状況外視点から聞き手への指示という形式で言語化された発話である。

では、同一場面で発せられる表現におけるこのような表現形成上の視点の違いが、同じように対応する場面で使用される、コミュニケーション行動制御慣用表現以外の定型的な表現にも認められるのだろうか。もし認められるとするなら、慣用表現における日独の視点の違いはかなり一般的なものと確認できることになる。身近な例として、たとえば、公共施設内で段差という危険な箇所において、その危険を知らせる慣用的な表現がある。ドイツ語では“Vorsicht! Stufe”、日本語では「足元注意」が対応する表現である。両表現には表現視点の差異が看取できる。すなわち、前者は状況外から読み手に段差があることを客観的な視点から指示し、注意を促しているが、後者は状況内にいる読み手の視点から自分の「足元」に注意することが述べられている。さらに別の慣用表現として、ドイツではほとんど見られないが、日本で走行している乗用車の後部窓に貼られている「赤ちゃんが乗っています」といったステッカー表現が挙げられる。これは後続する車の運転者に対して、ステッカーを貼っている車内の視点から赤ん坊が乗っているという車内情報を提供するものであるが、このステッカーの表現だけでは後続車に対して実際に何を伝えようとしているのかは必ずしも明確でない。これは、先の「危ない!」と同様に、状況内から状況内の事態を記述しているに過ぎない。このようにコミュニケ

ーション行動制御慣用表現の分析結果の一部と平行する傾向が認められる。もしこれがより多くの看板表現や他の対応する場面の定型的な慣用表現に認められるなら、対応する日独表現の視点の違いは、より一般的な現象として位置づけることが可能となる。

## 2. 研究の目的

本研究は、上記の例が示しているような言語表現に認められる表現視点の差異を日常的な資料を用いて明らかにしようとするものである。すなわち、本研究の目的は、第一に、日本とドイツの対応する公共場面などで見られる特定の慣用化された表現（案内表示版などの指示表現など）を収集・分析し、その表現形式と使用語彙の類型化を行なった上で、両言語表現形式の相違点と類似点を明らかにすることにある。第二に、両言語について明らかにされた言語表現形式の類型的差異が、日常的なコミュニケーションにおける協調行動の視点の類型的な差異に対応しているかどうかを検討し、それによって、両社会の社会化過程において使用される慣用化された表現に認められる視点との関わりを検証することである。

## 3. 研究の方法

本研究では、まず、日本社会とドイツ社会の類似する公共空間で言語化される定型的な言語表現を、標識、看板、案内板、掲示板、ステッカー、垂れ幕といったさまざまな形態の表示板を通して収集する。収集された定型的な慣用表現（看板表現もしくはサイン表現と呼ぶ）は、その使用場面と関連づけて、日本とドイツで対比的に分析する。看板表現は大きく2つのグループに分けられ、各グループはさらに2つのサブグループに分類される。したがって、日独で対応

する定型表現の組み合わせとしては、おおよそ次の4つが考えられる：

- 1) 機能的に対応
  - 1a) 意味的・機能的に対応：
  - 1b) 機能的にのみ対応：
- 2) 機能的に非対応
  - 2a) 異なる機能をもつ：
  - 2b) 対応表現なし：

形式的にこの4つの枠組みを利用し、収集した言語表現を分類する。その分類に基づいて、言語表現方法における視点の違いや提供する情報の違いを抽出する。そして、それらの結果に基づいて、日本語社会とドイツ語社会で当たり前とされるコミュニケーション行動の基本的な視点や考え方、情報提供法などを明らかにする。

## 4. 研究成果

まずは、日本の公共空間で頻繁に目にする定型表現を収集した。公共空間とは、たとえば、JRの駅構内や空港、電車・バスや飛行機の中、観光地など、不特定多数の人たちが利用したり、訪れたりする空間をいう。定型表現とは、このような公共空間内に見られる案内板、標識、看板、ステッカー類に印刷されてある表現のことである。それらの定型表現をデジタルカメラを用いて撮影・記録した。そして、それらを表現形式と語彙の観点から分析を試みた。その結果、多くの表現がその看板を目にしている人物の視点、もしくはその人物周辺の視点から形成されているということが明らかになった。たとえば、バスの車内では、降車ボタンを押すと、「つぎ止まります」といった表示が車内前方、運転席の後ろ辺りに点灯する。この表現には主語がない。止まる主体は誰なのか。その主体に関する明確な限定はない。運転手なのか、乗客なのか、それともその両者か。いずれにせよ、この表現は、それを目にしている人物の視点、

すなわち表現行為が行なわれている状況内（車内）の視点から作られていることがわかる。同様の表現に「入れません」「飲めません」「脇から来る車に注意」などがある。

つぎに、ドイツで日本語の場合と同じようにフィールドワークによって同様の看板表現を収集した。その結果、日本語に認められるような状況内の視点からの表現は見つけることはできなかった。たとえば、日本語の「つぎ止まります」に対応するドイツ語表現は、“Wagen hält（車は止まります）”であった。この表現の形成視点は、運転手や乗客のいる状況（車内）の外側にある。車両を外側から客観的に描写していることからわかる。

フィールドワークにより収集できた日独で対応する看板表現は、日本語 208 例、ドイツ語 198 例であった。そのうち意味的・機能的に対応するのは 30 例であった。意味・機能上対応する表現のうち、表現視点の異なる者は 22.9 パーセントであった。

交通標識はほとんどがピクトグラム化され、言語表現が表示されているものはきわめて少ない。そこで、交通標識については、その法律規定書の表現を比較することにした。たとえば、水色の円盤の中央に白い矢印が描かれ、進行方向を示す標識があるが、その言語的説明は、「指定方向外進行禁止」と“Vorgeschriebene Fahrtrichtung”である。このような説明表現を日独の当該官庁が公開しているインターネットサイトを利用して収集し、比較を行なった。その結果、1) 日独で対応するもの、2) 日本にあってドイツにないもの、3) 逆に、日本にはないがドイツにあるものの 3 種があることがわかった。そのうちの、1) 日独で対応する交通標識に限定して比較を行なった。その結果、規制標識が 29 例、警戒標識が 19 例、指示標識が 4 例対応していることが確認された。たとえば、規制標識の「重量制

限」という日本語表現に対応するドイツ語は、“Verbot für Fahrzeuge über angegebene tatsächliches Gewicht”のように、機能（“Verbot（禁止）”）や対象（“Fahrzeuge über angegebene tatsächliches Gewicht”）が明確に述べられていることがわかる。表現視点については、それぞれ状況内と状況外という一般的に主張される違いも確認できた。しかしながら、このように異なる視点が認められたのは、27.6 パーセントであった。

このように、対応する場面において異なる視点の表現が出現する比率は比較的 low、看板が 22.9%であり、標識 27.6%であった。この結果は、従来の研究が明示しなかった数値であるが、予想外に低い値と言える。この理由の 1 つとしては、調査対象が公共場面での機能的かつ意味的に対応する標識と看板表現における定型的な表現に限定されていたためと推測される。そのような場面では表現の共通性が高くなる可能性がある。事実、駐車禁止を表わす看板表示でも公共性の高さの度合いによって表現方法が異なる。たとえば、公共の駐車場では「駐車禁止」「Parken verboten」のように形式的にも意味的にも共通性の高い表現が使われる。他方、個人住宅前では「入口につき駐車ご遠慮ください」「Einfahrt freihalten」といった表現が見られ、共通性の度合いが低くなる。このように公共性が高くなるほど言語形式や内容に共通点が多くなる傾向がある。この傾向は対人配慮の観点から説明できそうである。すなわち、看板などのサイン表現であっても、公共機関が不特定多数を相手にする場合と個人が不特定多数を相手にする場合で、対人配慮（ポライトネス）の意識が変化し、それが言語表現に現れると考えられる。

このように、日独で対応する看板表現を調査している際に、それぞれの言語内にお

いてポライトネスの違いが確認できた。これは、ランダムに設置されているわけではなく、状況ごとのポライトネスと関連していることが予想される。そこで、この疑問をテーマとして 2014 年度科学研究費補助金を申請したところ、採択され、継続的に研究できる基盤が得られた。

#### 5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計 15 件)

- [1] 西嶋義憲 「言語表現における視点の異なりとその割合 公共サインの言語表現の日独比較を例に」. In: 日本独文学会中国四国支部 『ドイツ文学論集』第 47 号, 2014 (印刷中). [査読有]
- [2] Nishijima, Yoshinori: “Politeness in Sign Expressions: A Comparison of English, German, and Japanese.” In: *Intercultural Communication Studies* (ICS) XXIII (2), 2014 (in press). [査読有]
- [3] Nishijima, Yoshinori: “A Contrastive Analysis of Traffic Signs in Japanese and German: The Difference of Perspective”. In: 日本文体論学会 『文体論研究』第 60 号, 2014, pp. 17-32. [査読有]
- [4] Nishijima, Yoshinori: “*Omoiyari no aru and Rücksichtsvoll*: A Contrastive Analysis of Evaluating Concepts of Communicative Behavior”. In: Akira Tokuyasu, Makoto Kobayashi, & Mototaka Mori (eds.): *Life Course and Life Style in Comparison: Proceedings of the 11th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences*, 2013, pp. 277-286. [査読無]
- [5] Nishijima, Yoshinori: “Methods for Comparison of Perspectives in Linguistic Formulation: Japanese and German.” In: *Intercultural*

*Communication Studies* (ICS) XXII(2), 2013, pp. 110-123. [査読有]

- [6] Nishijima, Yoshinori: “Seeing-through Utterances in the Work of Franz Kafka: A Functional Analysis of Three Novels.” In: Georgeta Rata (ed.): *Linguistic Studies of Human Language*. Athens: ATINER, 2013, pp. 55-68. [査読有]
- [7] 陶琳・尹秀美・西嶋義憲 「『丁寧さ』・『礼貌』・『恭遜』 “Politeness” に対応する日常的個別概念の日・中・韓比較」. In: 語彙研究会 『語彙研究』第 10 号, 2012, 1-12. [査読有]
- [8] 西嶋義憲 「お見通し行為としての『父への手紙』」. In: 「かいろす」の会 『かいろす』第 50 号, 2012, 18-31. [査読有]
- [9] 西嶋義憲 「『お見通し』発言と翻訳レトリックの翻訳可能性」. In: 日本独文学会中国四国支部 『ドイツ文学論集』第 45 号, 2012, pp. 33-46. [査読有]
- [10] 陶琳・尹秀美・西嶋義憲 「コミュニケーション行動評価概念の日中韓露比較 大学生に対する調査に基づいて」. In: 語彙研究会 『語彙研究』第 9 号, 2011, pp. 103-111. [査読有]

(学会発表)(計 16 件)

Tao, Lin; Yoon, Sumi; and Nishijima, Yoshinori: ““Teinei (丁寧)”, “limao (礼貌)”, and “konson (恭遜)”: A Comparison of Corresponding Japanese, Chinese, and Korean Concepts of “politeness” in English “Teinei”.” “The 2013 International Conference on Applied Linguistics (APLX 2013), National Taipei University of Technology, Taipei, Taiwan, 14.-15. November, 2013.

西嶋義憲 「公共サインの言語表現の日独比較」. 第 62 回日本独文学会中国四国支

部研究発表会, 松山大学, 愛媛, 2013 年 11 月 2 日.

Nishijima, Yoshinori: “Politeness in Routine Formulas in Public Spaces: A Comparison of English, German, and Japanese.” Paper presented at the 19th International Conference of the International Association of Intercultural Communication Studies (IAICS2013), Far Eastern Federal University, Vladivostok, Russia, 3.-5. October, 2013.

Nishijima, Yoshinori: “Perspectives in Japanese and German: A Contrastive Analysis of Sign Expressions in Public Spaces.” Paper presented at the 19th International Congress of Linguists (CIL19), University of Geneva, Geneva, Switzerland, 21.-27. July, 2013.

西嶋義憲「交通標識の言語的説明表現の日独英比較 「らしさ」の対照」. 日本文体論学会第 103 回大会, 文京学院大学本郷キャンパス, 東京, 2013 年 6 月 22・23 日.

Nishijima, Yoshinori: “A Contrastive Analysis of Traffic Signs between Japanese and German.” Paper presented at the 3rd International Conference of Meaning, Context and Cognition (MCC2013), University of Lodz, Poland, 11.-13. April, 2013.

Nishijima, Yoshinori: “Rhetorical use of non-evidentials in the work of Franz Kafka.” Paper presented at the International Linguistic Conference: Distance in Language, Language of Distance, Ludwig-Maximilians-University Munich, Germany, 5.-6. April, 2013.

陶琳・尹秀美・西嶋義憲「『丁寧』・『礼

貌』・『(恭遜)』 Politeness に対応する個別概念の日中韓比較」第 10 回語彙研究会大会, 駒澤大学深沢キャンパス, 東京, 2012 年 9 月 8 日.

Nishijima, Yoshinori: “Difference in Perspective: A Contrastive Study of Controlling Routine Formulas for Communicative Behavior in Japanese and German.” Paper presented at the 18th International Conference of the International Association for Intercultural Communication Studies (IAICS2012), Yuan Ze University, Taipei, Taiwan, 8-11 June, 2012.

Nishijima, Yoshinori: “Different Perspectives: A Contrastive Analysis of Functionally Equivalent Routine Formulas for Communicative Behavior in Japanese and German.” Paper presented at the 2nd International Conference of Meaning, Context and Cognition (MCC2012), University of Lodz, Lodz, Poland, 24. March, 2012.

西嶋義憲「『うるさい!』と“Ruhe!” : コミュニケーション行動制御慣用表現の日独対照の試み」. 第 60 回日本独文学会中国四国支部研究発表会, 高知大学朝倉キャンパス, 2011 年 11 月 5 日.

〔図書〕(計 1 件)

古川昌文・西嶋義憲 共編著『カフカ中期作品論集』同学社, 2011, p. 397+ vi, (分担執筆「天井桟敷にて 構造分析」および「流刑地にて 「お見通し」発言の分析」).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西嶋 義憲 (NISHIJIMA, YOSHINORI)  
金沢大学・経済学経営学系・教授  
研究者番号: 20242539